

## 研究課題：インド国外でのインド映画の需要と受容～日中比較のための準備調査～

本研究の目的は、インドの娯楽映画がインド国外でどれほど受容され得るのか、換言するならばどれほど普遍的な商品価値があるのかを解明するために、中国のインド映画受容と需要を総合的に調査するための基盤作りをするところにあった。その第一歩として中国側の先行研究を検証し、インド映画に対する評価の方向性とその変化を位置づける作業に着手した。具体的には、近年に刊行されている次の中文論文を分析し、そこに共通して観察できる評価基準と、背景に介在するはずの政治的傾向を抽出しようとした。即ちそれは、

张慧瑜「印度宝莱坞电影及其对“中国大片”的启示」

谭政「印度电影的多语种生态与管理体制」

张文娟「解读印度电影“现象级”传播的密码」

张恣煜「再见，甘地！——独立后印度政治电影的审美意识形态生产」

傅海「新世纪中印票房冠军电影的海外接受比较研究——基于 IMDb 与豆瓣网数据」

张燕「想象的历史：印度史诗电影研究」である。

ここから判明したことを、以下の主要4点にまとめる。すなわち、

(1) 中国においてはインド映画は独自編集によって（しばしば短縮版で）上映される事例があり、それがヒット作に直結しやすいこと

(2) 中国におけるインド映画のヒット作は必ずしもインドにおけるそれとは連動していないこと、またそれは輸入の段階から特定の作品が忌避される傾向にあることと関連していること

(3) 中国の研究者はもっぱらヒンディー語映画を研究対象としており、これに比べるとテルグ語などの地方語映画に関する知見と関心が乏しく、その結果現在インド映画市場で起こっている「汎インド映画」流行の重要性を正しく認知しきれていないこと

(4) 中国の学会ではかつてのインドの会議派政権時代のイデオロギーを高く評価しており、相対的に現・インド人民党政権の執る反世俗主義政策に批判的で、このことがインド映画評価に大きく影響していること

である。

ここからある程度の妥当性をもって、中国市場のインド映画受容が擁する一定の傾向を抽出することは可能と思われる。それを言語化して公表するのは次の段階の作業となるが、ここで得た知見をベースに「自由市場」的な日本での受容（と需要）と比較検証を行うならば、インド映画の持つグローバルな価値（地域横断的普遍性）が海外市場でどれほど一般化しうるものであるかという、筆者がかねてから課題としている問題点の解明にもつながり、将来的にはインド映画の「普遍性」をもってハリウッドの世界市場支配を再検証するというより巨視的な課題にも有益な方法論を提供することが期待される。